

第一回

この新連載について、説明しておく。 ここで行うのは、私(団士郎)の漫画作品「木 陰の物語」にまつわる対話である。

200話を超えている「木陰の物語」は一般 読者を対象に長期連載してきたものだ。現在 も、「月刊学校教育相談」誌、「月刊福祉」誌、 季刊「かぞくのじかん」誌に連載中である。

そのマンガを、あえて読者対象層を狭め、もっと意図的に解説的対話をしてみるのが本企 画である。

そもそもは 2017 年の夏、ナラティヴセラピー の翻訳や著作の多くある小森康永氏(愛知県 がんセンター医師)からの声かけから始まって いる。

「グラフィック メディスン(GM)というものがあって、欧米では 10 年ほどの経過実績がある。学会も開かれていて、そこでは時には医療関係者自身が漫画を描いて、医学教育に貢献している。団さんの描いているものと共通するものがあるのではないか」という説明だった。

GMがどんなものなのか今ひとつ分からなかったが、マンガの可能性の話としてはよく理

解できた。そしてGMの作品として翻訳出版されていた「スティッチ」、「母のがん」を読んだ。

とても深い中身の読み応えある作品だった。 一般のコミックスのように、多くの読者、大きなマーケットを期待して創作されているものではない。当然出版社もマイナーだった。

なにかを本当に届けよう!と思う時、誰にも わかりやすくするというのは得策ではない。む しろ、確実に届く少人数向けのコンテンツを固 めることだ。そしてそれが確かなものに出来 上がっていたら、いずれは多くの人にも届くだ ろうと期待して辛抱することだ。

私の作品の中から岡田さんが選んで、それについて対話すれば、読者を絞った、家族心理臨床版GMのような作品が創れるかもしれないと思った。

そして、昨秋から準備に入り、12 月に広島 で岡田さんと会って話し、2018年春、制作の ための対話を、LINEを使って繰り返した。

この連載が続いたら、何か新しいものに出 会えそうな気がしている。

2018/9/15 団士郎

た授業をしている。

がかねてから鼻についていた。若者のコミュニケーション力批判



実習授業をと、

題

ペアになったその日に教室で

自分の

未知の人に、

コミュニケーションの上手くいっていない 悩みを手短に話す。

思いこみにお節介し続けている。生のコミュニケーションに関する とにかく様々な切り口から、受講 AD09-7

なっている。 異色の授業に 百人規模の教室で させている。 対話の実技を 每週、每週、

> 一寸した悩みがいろんな関係の彼女、彼氏等、 両親、友人、サークルの下級生、 バイト先の上司ととか、



求めるという相手に助言を 報告し、悩みを探して ける、具体的なその一つに、自分の関係世界にお エクササイズがある。

必ず具体的な提案をする。 聞かされた方は、それに何か一つ



を次回までに実行してみる。 助言された側は、出来るだけそれ

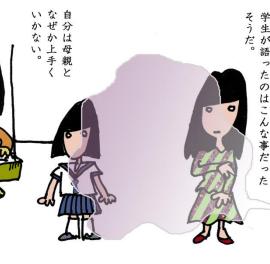


軽々しくは他人の事について知れば知るほど、 語れなくなる。





学生が語ったのはこんな事だった ある時、一組の男女ペアで、女子



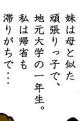
事である。

側が相手のことをあまり知らない このポイントは、アドバイスする

> ŧ 下宿暮らしになる大学を選んだの 心の底にはそれがあった。



したままである。 いつの頃からかぎくしゃく共働きで頑張り屋の母と、







聞かされた男子学生は、

理由なんがなくても) いいかんの そして お母さんのかわりに家族 コハン作って あげたら?

と彼女は思った。出来るはずがない突然そんなこと



時間は過ぎた。あっという間に 変わりなく、 家族は驚いたが、 特にいつもと



帰省した。 土曜の午後、 彼女は連絡もせずに



ればならない。家族もそれぞれ出月曜の朝には又、大学に戻らなけ 勤、登校する。

講師がいつもいう

じこめるな。自分のために自由「固めてしまった説明に自分を閉 だということを忘れるな」

でもそこで、

(1)

を思い出した。



と手渡した。 当を整えて、それぞれに「はい!」 翌朝、自分の分も含めて四つの弁



ことにした。 彼女は決心して家族の弁当を作る



して家を出た。 バタバタとあっけなくみんなが出

0



あんな事くらいで、何かが変わる



泣いてた…」 「お母さん、 お弁当箱





た一つ、大きな仕事をしてくれた採点されるわけでもない宿題がま と思ってレポートを読んだ。

る気がした。 てくれた妹に、とても素直になれ 母に、そしてそのことを伝えてき





木陰の物語を家族の日常として味わう人、 臨床の手引きとして携える人、時代の警鐘とし て読む人、人間の生き様として噛みしめる人な ど、いろんな人がいろんな風に読んでいると思 う。で、自分の場合は、という話題から入るね。 最初に取り上げるのは「宿題」。というのは

勝手にこれを代表作だと思っているので。





本でも映画でも、始まると一歩先、さらには結末を予想しながら味わわない?予想通りの大団円とか、裏切りのどんでん返しとか・・。



「宿題」はどうなんだろうと思うと、結末は予想通りなんだけど、そのプロセスに予想も しなかったことがあって。



例えば、授業だから言わなければならないから言った男性学生の軽いアドバイス。読者から すれば、ここはサラッと読み過ぎるところ。

それを「ちょっと待って、ここにも大事なことが ある」とばかり、「深い事情を知らないからこそ 言える事がある」とくる。こういう「予想外」がグ サッとくる。



そして「そんなこと実行できるはずがない・・・」という予想に、

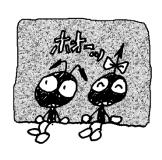
「とりあえずやるだけやって みよう、課題なんだから」と いう枠。



心を込めないから、逆にうまくいったりする。心を込めたり、思い詰めたりすると、相手にも同じものを期待してしまう。



確かに、たいていの場合、 期待外れになって、その結 果、怒りが生じる。で、今ま でと同じ、自分が努力したっ て何も変わりはしないと。 それを「とりあえずやっとこ う」と枠付けしている。



これ、まさに心理臨床そのもの。このあたり、臨床を知りたい学生さんはどう感じているかな?自己責任、自己決定、主体性、なんてものを脇に置いて、こころなんかを持ち出さない方がうまくいくことがある、と心理臨床家が説く。学生さんにこの逆説がうまくわかってもらえたか、と気になった。



作品のキモでもあるから。ま ぁ、キモだらけではあるんだ けど・・。

そして実家に帰る、ここから 先はアルアルの予想通りの 展開。



信頼できる人の言葉だからとか、親が言うのだからとか、そういう前置きで自分の行動選択を 話りたがる人は多いね。

そうそう、臨床場面でも、「先生がそう言うなら・・・」、なんてよく聞く台詞。だけど実行するかは別よね。





学生さんは助言に従って、まじめに努力し、変わろうと 踏み出した。少し期待もする。 ヒトって努力への報酬を求 めるものだから。 でも、現実は、この程度じゃ 何も変わらなかった。やっぱ りと思いつつ、失望も。



もしかしたら家族や助言した男子学生への怒りもあったかもしれない。自分を慰めながら帰る 彼女。両親はどうなんだろう?この辺は予想通 りの展開だね。

ABU



良いわけじゃないのに、予想通りを喜ぶ感覚ってあるね。「ほーら、やっぱりね!」とか。

母親のテレ隠しみたいなセリフは、「ここは昔の ままよ、何も変わっていないから安心して帰ってきて」という誠実さでもあるんだけど、実はまさに現状維持のシステムでもある。ここまで、彼女の予想通り、読者の予想通りで来た。



ここで、それをひっくり返すのが妹です。ボクは この妹にやられた。これが臨床のセンス!と。

妹が持っている運と言うのもある気がする。母 がキッチンで泣いているのを目にできるタイミン グなんて、そんなに長い時間じゃない。





ボクは実際に母が泣いていたかどうかなんて、 どうでもいいと思う。



人がすごいのは現実とは別に、イメージができること。そして、それを共有する術、言葉を持っているところだから。

そうか、それは思ったことが なかった。確かにそうだ。物 語は事実だけで構成される 必要はないよね。



そうそう、どう語られるかだもんね。少なくとも姉妹の間では、やり取りを通じて現実になっている。妹と姉との間で、それで合意できたら現実として機能する。

そんな場面を妹は、ずっと心の中で願って待っ ていたとか。

母は本当に泣いていたのか?という視点は、これまでなかった。面白いなぁ。

うん、イメージとして持てたらいい。 イメージする力、それを共有して合意する関係、 そこもこの作品のキモだと思う。



人との関係は、事実よりも 対象への思い込みや、決め つけの結果である事が少な くないね。

そうそう、それもある種のイメージだけど、同意や合意 や共有というのが欠けていたら、ただの思い込みで終わってしまう。



今、思ったんだけど、岡田さんはよくこういう語りをするよね。私は結構、起きた事実から語りたがるんだけど。この違いは何だろう?



そう? それは気がつかなかった。違いと言えば、ボクは 部分にこだわるところがあっ て。団さんは、全体というか、 世の中とか時代とかというメ ガネで見てるといつも感じて る。

医療背景と心理臨床背景 の差なのかなぁ?



それってマンガ家の視点じゃないだろうか。目の前のことを切り取って、いったん離れて時代や人間といった、それこそイメージの中に置いて、それから紙面に戻す。違うかな?

なるほどなぁ。自分の視点 だと思ってるから、漫画家の 視点だなんて、この頃余り 考えなくなっていたなぁ。

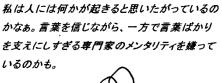




それより最近ますます、何も変化の起こせていないセラピーにイラッとしてる。

それはいっしょ。だからムキになって「既に変わっている部分」を探してる、なければ創ってでもという勢いで。

起きたことから大きな影響を受ける人の姿を知っているからかな。説明より事実の方が強いっ





まさにそれ。すっごく大きな視点でしょ、ボクは そういうのが浮かんでこないから、どうコメントし ていいかわからない。ボクは接写で撮る、団さ んはズームで寄った後、引いて撮る。



マンガに戻すと、妹の電話は読者にとって完璧に予想外。ストレートに応じきれなかった母の 哀しさも含めた家族というものが伝わってくる。 で、一気に読者の緊張がストンと緩和される。







まさに桂枝雀さんの言う緊張と緩和です。 この落差にウルウル・・。この予想を裏切る落 差が大きければ大きいほど、こころは震える。

木陰の物語は臨床家が描いているんだなぁという感想でした。



共有したいと願うイメージが母娘にあるのかな。 それをうまくセットさせてあげることがはじめの 一歩か?

> そう、それを嗅ぎ取った妹の役割、あの電話の コマを描くのが援助者の役割かなと思った。



よく、どうなれば今より少しはマシですかって聞くよね。それをどう投げかけたら関係に処方できるのかな?



どうなればマシですかってたずねても、いい返 事が帰ってくることってあまりなくない?それくら いパイアスがかかった現状認識にどっぷりなん だろうね。

で、ここなんか前よりマシなんじゃないですかっ て言ってしまう。そこからイメージしてもらう的 な。



自分たちで生み出せるよう に対応するのは何が秘訣な のかな・・・

事実として泣いていなくても 良い、というのが「宿題」の <u>心理臨床家読み</u>の胆という ことで描いてみるわ。



ほんまですか、楽しみです しゃべりながら考えがまとま っていくのが楽しかった。

岡田隆介



団さんとは、これまでも研修会などで会うといろんなことを明け方までしゃべるようなことがよくありました。「木陰のおしゃべり」企画は、そうした経験がベースにあると思います。言うまでもないけど7:3くらいで団さんがしゃべり、夜が更けると8:2くらいになるわけです。

ですが今回は Line を使い文字でやりとりしたので、わたし、けっこう頑張ってます。読者が作品を選んで作者にぶつける形になったので、当然といえば当然ですが。

「木陰の物語」というこの時代を刻んで後世に残る作品に、ほんのわずかですが接点を持てる幸運を大事にしたいと思います。ちょっとはしゃぎ過ぎた感じもするので、もう少し作者の思いを引き出す方向に頑張るべきかな、でもインタビュアにはなりたくないし、まあ宿の夜でいきましょう。

実は、家族療法学会で団さんが小森さん(愛知県がんセンター)からリフレク ティングチームみたいだと言われたと聞き、「即、いただき!」という気持ちになっています。

高齢者二人が宿で話し込んでいるような「木陰のおしゃべり」に加わっている 気分でご覧いただけたら幸いです。